



**Data**

監督・脚本：ファティ・アキン  
 出演：パーキ・ダヴラク / ハンナ・シグラ / ヌルセル・キョセ / トウンジェル・クルティズ / ヌルギュル・イエシルチャイ / パトリシア・ジોકロースカ

## 👁️👁️ みどころ

若きトルコ系ドイツ人監督ファティ・アキンの「トルコとの愛憎関係」という問題意識が、『愛より強く』(04年)に続く大傑作を生み出すことに！3組の親子が紡ぎ出すストーリーは日本人には少し難しいが、その充実度はピカイチ。さらに、ちょっと長すぎる邦題もピッタリ！ドイツにはこんなすごい若手監督がいることに感激！それに比べると、と言っちゃダメなのだが・・・。

\* \* \* \* \*

## ドイツにはこんなすごい監督が！

2004年ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した『愛より強く』(04年)を観て、私の頭の中にきっちりインプットされたのが、トルコ系ドイツ人のファティ・アキン監督(『シネマルーム11』123頁参照)。そんなファティ・アキン監督の最新作である『そして、私たちは愛に帰る』は、07年カンヌ国際映画祭での最優秀脚本賞と全キリスト協会賞をはじめたくさんの賞を受賞した必見の作品。最近私は、『この自由な世界で』(07年)、『ロルナの祈り』(08年)、『懺悔』(84年)、『英国王 給仕人に乾杯！』(07年)、『シリアの花嫁』(04年)、『ディファイアンス』(08年)など骨のあるヨーロッパ映画をたくさん観ているが、ファティ・アキン監督の『そして、私たちは愛に帰る』は例によって(?)ドイツ人監督ファティ・アキンが持つトルコへの愛憎関係をベースとし、3組の親子が織りなす物語を壮大なスケールで描いた傑作。

こんな骨太作品が次々登場すれば、近時のコミックを映画化したようないかにも小粒な邦画を観る気がしなくなってくるのは当然。ファティ・アキン監督は1973年生まれというから、まだ35~36歳。ドイツにこんなすごい若手監督がいるのは、やはり小さい時からドイツへのトルコからの大量移民という深刻な問題に直面しているため。平和で豊

かな島国ニッポンの中だけで、ごくわずかの友人とケータイだけで繋がっている今ドキの若者と比べれば、月とスッポン状態になるのは仕方なし・・・？

### 3組の親子の物語が、3つの章で

この映画はドイツとトルコを舞台として、1組の父と息子、2組の母と娘合計3組の親子の物語が3つの章で紡がれていく。トルコから270万人という大量の移民を受け入れたドイツにおける、トルコ（人）問題はいろいろと深刻。また、トルコ共和国のEU（欧州連合）への加盟をめぐる政治問題は根深い。他方、トルコ国内ではイスラム勢力や民族主義が根強いはずだから、そう簡単にドイツと一体化・融合化することができないのは当然。

この映画の原題は『The Edge of Heaven』だが、邦題は『そして、私たちは愛に帰る』。両者ともこの映画の本質をうまく表現しているが、さてファティ・アキン監督は3組の親子の物語を、3つの章でいかに展開・・・？

### 3組の親子 その1 - アリとネジャット

日本人に馴染みの薄いドイツ（人）VSトルコ（人）問題がテーマであるうえ、3つの章で展開される物語は一見何の脈絡もなさそうに見えるから、この映画の全体像をきっちり理解し、「そして、私たちは愛に帰る」ことを納得するのは結構難しい。そのためにも、何よりも重要な登場人物6名のキャラとその人間関係をきっちり理解しておく必要がある。できれば簡単な人間関係図をつくった方が・・・。

そんな意味で、まずは3組の親子を紹介し、その後3つの章のストーリーを紹介しよう。3組の親子その1は、ドイツのプレーメンに住む初老のトルコ移民の男アリ（トゥンジェル・クルティズ）とその息子ネジャット（パーキ・ダヴラク）。生まれてすぐ母親を亡くしたネジャットは父親の手で育てられたが、今はドイツのハンブルクで大学教授をしている身分。しかし、一人暮らしをしている父親は・・・？

### 3組の親子 その2 - イェテルとアイテン

3組の親子その2は、ドイツで売春婦をしている女性イェテル（ヌルセル・キョセ）とトルコの大学に通っている一人娘アイテン（ヌルギュル・イエシルチャイ）。イェテルはアイテンにドイツの靴屋で働いていると説明しているらしいが、それは一体なぜ？

この映画は、ドイツのプレーメンに住むアリが娼婦街でイェテルを見つけるところからスタートするが、さてアリとイェテルとの間にはどんな（男女）関係が・・・？

### 3組の親子 その3 - スザンヌとロッテ

3組の親子その3は、ハンブルクに住むドイツ人の母親スザンヌ（ハンナ・シグラ）と

ハンブルクの大学に通う娘ロッテ（パトリシア・ジオクロースカ）平凡な生活を営んでいるこの母娘が問題に巻き込まれたのは、ロッテが大学の学食でイエテルの娘のアイテンと出会い、その援助を始めたため。その結果、スザンヌとロッテの母娘関係にどんな激変が・・・？

## 第1章『イエテルの死』の展開は？ その1

前述のように、映画冒頭は娼婦街で女を物色するアリの姿からスタートする。「トルコ人もね」という娼婦イエテルを気に入ったアリは、30分間50ユーロのコースでコトをすませたが、その後、イエテルはアリの家に入り込むことになるから、そんなストーリー展開にビックリ。

アリがイエテルに提示した条件は、アリと共に暮らし、アリの要求があれば寝ること（エッチする）だけ。その条件さえ満たせば、今稼いでいる額と同じ額を支払うというのだから、イエテルがそれに乗ったのはある意味当然。一見合理的な(?)契約内容だし、大人の男女がそれで合意したのだから問題はないはずだが、さてその行方は？

アリはそんな勝手気ままな男だから、そんな父親の家にネジャットがたまに戻ってきても2人の間に話題はない。また、ネジャットが「これを読んだら」と本を勧めても、アリは全然読む気はなさそう。さらに今回ネジャットが家に帰ってみると、なぜか一緒に住んでいる女性イエテルがいたから、ネジャットはビックリ。

## 第1章『イエテルの死』の展開は？ その2

第1章はそのタイトルどおり、イエテルの死で終わる。イエテルが死亡したのは、「ここを出て行く」と宣言したイエテルをカッとなったアリが思わず殴り倒したところ、その打ちどころが悪かったため。アリとイエテルの契約は当初こそうまくいっていたのだが、アリの入院中にネジャットとイエテルがデキたのではないかと心配したアリは、ネジャットにもイエテルにも露骨な質問を浴びせたから、これにはネジャットもイエテルもウンザリ。

他方、アリの入院中にネジャットがイエテルから聞いたのは、イエテルはトルコに残る一人娘アイテンを大学に通わせるため、ドイツに出稼ぎに来ていたということ。そして、娘には靴屋で働いているとウソをついていると語ったが、そんな語らいの中で思わず涙ぐむ場面も。そんなストーリーを経る中アリの口汚い言葉に反発したイエテルがアリに殴り倒されたことによって突然死亡し、アリは刑務所に収監されることに。

他方、トルコでのイエテルの葬儀に出席したネジャットがそこでわかったのは、イエテルの娘のアイテンが葬儀に参列していないのはその消息がわからなくなっているためだということ。そこで、ネジャットが下した決断は、アイテンを探し出すべくしばらくトルコに留まること。まちを歩いている中、売りに出されていた「ドイツ語専門書店」を発見し

たネジャットは、その書店の主になり、ここを拠点としてアイテンを探す努力を開始したが・・・。

## 第2章『ロッテの死』の展開は？ その1

第2章『ロッテの死』では、ドイツ人の母スザンヌの娘であるロッテの死が描かれる。ロッテとアイテンがはじめて出会うのはロッテが通うハンブルクの大学の学食。第2章冒頭の舞台は、トルコのイスタンブール。そこで描かれるのは、デモ隊と警察との衝突。女子学生らしき娘アイテンは、混乱の中で奪った銃を持って今やっと警察の追跡を振り切ったところ。どうも、彼女は反政府運動の闘士のようなだ。

仲間たちの協力によって偽造パスポートを得て、アイテンがドイツに向かったのは、情報がわからなくなった母親イエテルを探し出すため。イエテルの勤め先は靴屋だから、片っ端から尋ねたがなかなか見つからず、お金も尽きたところで出会ったのが女子学生のロッテだ。アイテンの境遇に同情したロッテは彼女を自宅に連れていき、母親のスザンヌに紹介したが、そんな娘の行動にスザンヌは批判的。だって、トルコからやって来たどこの馬の骨ともわからない女の子にいちいち同情していたのではキリがないから。そのうえ、「トルコがEUに加われれば状況が変わるわ」と考えるスザンヌに対して、アイテンは「EUなんて信じられないわ！EUなんてくそくらえよ！」と汚い言葉を浴びせたから、2人の関係は最悪。

## 第2章『ロッテの死』の展開は？ その2

他方、ダラダラした学生生活の中で、やっと自分の生き甲斐を見つけたらしいロッテは何かとアイテンの面倒を見ていたが、ある日シートベルト着用で警察から車を止められる中、アイテンの不法滞在が明らかになったから大変。アイテンは政治亡命の許可を申請したが、裁判所はこれを却下。その結果、アイテンはトルコに強制送還されトルコで裁判を受けたが、その罪は懲役15～20年の見込みらしい。

そんな話を聞いたロッテはアイテンを助けるため、すべてを投げ出してイスタンブールに行くことに。面会するだけで1、2カ月を要するというトルコの司法制度の中、やっとロッテがアイテンに面会できるようになったのはめでたい限り。しかし、そこでアイテンがロッテに対して、あの隠していた銃を組織に渡すよう依頼したことから、ロッテの死という不幸な結果を招くことに・・・。

## 第3章『天国のほとりで』の展開は？ その1

第3章『天国のほとりで』は原題である『The Edge of Heaven』を直訳したもので、いかにも最終章らしいタイトル。また、邦題の『そして、私たちは愛に帰る』もいかにピッタリ。さて、その展開は？

第3章は複数の物語が同時に展開されていく。第3章はまず刑期を終えて出所した後強制送還されたアリが、トルコのアタチュルク空港に降り立つところからスタート。あくまで自分勝手な生活が大好きなアリは、黒海沿いの海辺で釣りを楽しみながら生計を立てる道を選んだようだ。第3章のメインストーリーは、一人娘ロツテをバカバカしい事件によって失い、悲しみに暮れる母親スザンヌがドイツのハンブルクからトルコのイスタンブールへやってきたところから展開していくもの。ロツテがなぜネジャットの紹介したアパートで生活(下宿)していたのかは、第2章『ロツテの死』で語られている。したがって、ロツテの死を母親のスザンヌに報告したのはきっとネジャット。

ロツテの遺品を引き取るためにやって来たスザンヌだったが、ネジャットの案内で娘のアパートに入り、そのベッドで眠り、娘の日記を読む中、ある安心感が芽生えてきたから不思議なものだ。さらに不思議なのは、そんな形で死んだ娘の母親への思いを綴った日記を読み、アイテンに対する熱い思いに接する中で、スザンヌの心の中に新たな希望と自分の役割が明確に見えてきたこと。それはすなわち、娘ロツテがすべてを捨てて実現しようとしたアイテンの救出だ。スザンヌにとってアイテンは理解できないトルコ娘であり、ロツテを悪の道に引きずり込んだ悪い女だったはず。それがなぜ、こんな変化を・・・？そのキーワードは愛。

### 第3章『天国のほとり』の展開は？ その2

他方、息子ネジャットと父親アリとの関係は、第1章から一貫して最悪。第1章のラストシーンは、イスタンブールのドイツ語専門書店のオーナーになったネジャットに対して、父親のことを尋ねる知人に対して、「人殺しなんて、父親じゃない！」と冷たく言い放っていたのだから。したがって、第3章で出所してきたアリが黒海沿岸で釣りで生計を立てているという情報を得ても、ネジャットにはそれは何の関係もないことだった。

ところが、今イスタンブールでスザンヌが娘ロツテの思いを代わりに実現するかのようアイテンの救出に精を出す姿を見て、ネジャットの心にも大きな変化が起きたようだ。あたかも今イスタンブールでは、イスラム教の祭りである「犠牲祭」が始まっていた。イスタンブールのまちはそれに向かうトルコ人でいっぱい。イスタンブール暮らしに少し慣れたネジャットは、はじめてイスタンブールを訪れたスザンヌにこの祭りの起源を教えたが、もちろんそれは私もはじめて聞く話。すなわち、「犠牲祭」の起源とは次のとおりだ。「信仰を試すため、息子を捧げよと神に命じられたイブラヒムは、子のイシュマエルを供物台へと載せた。短剣が振り下ろされる瞬間、刃先が丸くなった」というもの。

このようにネジャットがスザンヌに「犠牲祭」の起源を語った後のスザンヌに対する告白は、「“僕を捧げる？”と父さんに聞いたことがある」というもの。そして、「お父様の答えは？」とのスザンヌの質問に対するネジャットの答えは、「“父さんはお前を守るためなら、神だって敵に回す”と・・・」というものだった。スザンヌとのこんな会話を通じ

て、あれほど遠くにいたはずの父親アリが、今ネジャットにとってすぐ近く存在になったわけだ。そんな会話によって父親の自分に対する思いを感じとったネジャットがそこでとった行動は、アリに会うため車を駆って黒海沿岸に走らせること。さて、ネジャットとアリの愛の帰るところは・・・？

2009(平成21)年1月28日記

## こりゃ、法曹界における国家的詐欺？

遂に09年5月21日から裁判員制度が実施されたが、反対論と不安は根強くその前途は険しい。「緑のオーナー」制度への損害賠償請求訴訟提起の動きは、契約時の説明義務違反による国家賠償責任あるいは債務不履行責任の追及だが、事実上破綻状態にある日本国の年金制度も巨大な国家的詐欺のようなもの？だって年間予算が88兆円なのに、国民からの借金である国債が680兆円もあり、年間支出の20%が国債の利払いという「家計」は、破産と同じようなものだから。

そんな日本国が、法曹人口の増大と法曹界への多様な人材の送り込みを目標として、2004年に創設したのが法科大学院。ところが、それから5年。修了者の新司法試験合格率の低迷もあり、定員割れとなる大学院が約8割にのぼる中、法科大学院協会は09年6月1日、全国74校のうち9割の65校が定員削減を決定ないし検討していると発表した。74校の法科大学院に6000名近くも入学させたら、「修了者の約80%が新司法試験に合格する」が謳い文

句だったはずの新制度の根幹が狂うことは最初から自明のはず。案の定、合格率は06年は48.3%、07年は40.2%と減り続けたうえ、08年には46校が定員割れとなり、合格率は約33%に下落した。そのため、社会人から法科大学院への転身組は激減し、挙げ句の果ては、定員を2年間で1000人減らすというわけだ。日弁連も定員を4000名に削減するよう提言しているが、そうコロコロと提言が変わり、国の制度が変わったのでは、法曹界を目指す若者たちは大迷惑。この制度は法曹人口を年間5000名から3000名に増大させるとした大戦略の一貫だが、2000名合格の現時点で既にアップアップ。弁護士バッジはつけたが就職先なし、仕事なしという事態が広がっている。

しかして、私の周りには、法科大学院を卒業したものの、新司法試験は落ちたし、就職口もなし、そのうえ親の援助は打ち切りで金もないというかわいそうな人たちがチラリホラリ。こりゃ、法曹界における国家的詐欺では？

2009(平成21)年6月3日記